

とう こし
塔の越遺跡

所在地 稲沢市長野町
(北緯35度15分28秒 東経136度48分49秒)
調査理由 都市計画道路稲沢西春線建設
調査期間 平成21年5月～平成21年8月
調査面積 710㎡
担当者 小澤一弘・宇佐見守・伊奈和彦



調査地点(1/2.5万「一宮」)

調査の経過 塔の越遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線の建設に伴う事前調査として、愛知県建設部都市整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。

立地と環境 本遺跡は稲沢市の東部、三宅川左岸の自然堤防上に立地する。東には古墳時代から江戸時代までの遺構を検出した長野北浦遺跡が存在する。

調査の概要 本年度の調査区は08A・B区の未調査部分3ヵ所で、東から09A～09C区として実施した。

A 区 近現代の水田造成時に削平されたため、遺構の残りは悪く、古代の掘立柱建物1棟を検出したのみである。掘立柱建物は大部分が調査区外のため全容は不明であるが、南北2間、東西1間以上の建物である。

B 区 近世以降の水田造成により調査区北側4分の3は削平され、残りの大部分も畑耕作により攪乱されており遺構の残りは悪かった。古代の井戸1基と溝5条を検出した。井戸は、直径約3.3m、深さ約0.7mの円形をした素掘りの井戸で、周囲に幅約20cmの溝が巡る。中から飛鳥時代の土師器、須恵器(高杯、杯、甕など)が出土した。他には土坑から瓦塔の破片が出土した。

C 区 畑耕作による攪乱が浅かったため、遺構の残りは良好で、遺構面を3面確認した。

第1面では、近世以降に掘削された大溝とそれに直交する溝を検出した。

古代の井戸 第2面では、中世の溝2条、古代の井戸2基、溝・土坑多数、古墳1基を検出した。中世の溝は第1面で検出した大溝と溝にそれぞれ平行しており、中から古瀬戸製品が出土した。古代の井戸のうち、円形をした素掘りの井戸は、大溝で削平されていたが、直径約1.8m、深さ約0.4mを測り、中から須恵器が出土した。方形をした木組みの井戸は、約4.8m四方の掘りかたをもつ大型の井戸で残りが大変良かった。木組みは上下2段に分かれる。下段は、上面の長辺約60cm・短辺約50cm、深さ約90cmを測る。建物の扉と思われる転用材を現地で加工し、箱状に組み立てている。上段は先端を削り細くした直径約20cmの丸太材を四隅に打ち込み、それを支えに、長辺約110cm、短辺約20cmの板材を4段積んでいる。井戸の中からは、灰釉陶器(手付水注、壺)、木製品(櫛、桶)、銅製品(ピンセット)、馬の骨などが出土した。古墳の墳丘は削平されていたが、幅約1.5～2.0m、深さ約0.3mの丸底をした堀が方形に巡っており、中から須恵器杯蓋・杯身が2組と、管玉1個が出土した。北半分が調査区外のため全容は不明であるが、1辺約7.5mの方墳と考えられる。

第3面では、方形の井戸の西側で柵列と思われる柱穴列を検出した。また、明確な遺構を伴はないが、古墳時代前期の土師器(壺・甕・高杯)の集中する場所を検出した。

(宇佐見 守)



09C 区全景（上空から）



09C 区平安時代の井戸（断ち割り調査時の状況）